



道総研

調査速報

道西日本海(檜山海域)スケトウダラ資源調査結果

2019年 12月 17日

北海道立総合研究機構 函館水産試験場 (0138-83-2893)

○2019年12月9～11日に図1に示した道西日本海の檜山海域において、函館水試調査船金星丸に搭載された計量魚群探知機(以下、計量魚探)用いたスケトウダラの分布調査を行いましたので、結果をお知らせします。

調査速報は下記の函館水試ホームページからもご覧になれます。

<http://www.hro.or.jp/list/fisheries/research/hakodate/>

- スケトウダラ魚群は主に奥尻海峡から相沼沖にかけて分布しており、江差以南ではほとんど分布が見られなかった。
- 魚群は概ね水深 300～500m に分布し、分布の中心は水深 400m であった。
- 魚探反応量は、前年の約 1.8 倍に増加したが、引き続き低水準。
- スケトウダラが分布していた水深 300～500m の水温は 2.1℃以下で、各調査点とも平年並みでした。

● スケトウダラ魚群の分布状況

・ 水平分布

スケトウダラ魚群の多くは奥尻海峡(奥尻島の東側)から相沼沖にかけて分布していました(図2)。一方、10月に実施した漁期前調査でスケトウダラがまとまって分布していた奥尻海脚(奥尻島の南側)や松前小島周辺(小島堆)では、ほとんど分布が見られませんでした(図無し)。

前年(2018年)と比較すると、全体的に魚探反応量は増加しており、特に奥尻海峡では前年の約12倍と大幅に増加しました(図2)。また、前年と同様に江差以南の海域ではほとんど分布が見られませんでした(図2, 3)。

・ 鉛直分布

スケトウダラ魚群は概ね水深300m～500mに分布していました(図3)。分布の中心は水深400mで、前年(450m)よりもやや浅くなっていました。

● スケトウダラ延縄漁場周辺の魚群反応量の経年変化

スケトウダラ延縄漁場とその周辺(図1の赤破線枠内)のスケトウダラ魚群反応量は前年の約1.8倍に増加しましたが、漁獲量が多かった2008年以前と比較すると引き続き低水準で推移しています(図4)。なお、魚探反応量が大幅に増加した奥尻海峡も含めると、前年の約3.4倍に増加しました。

● スケトウダラ延縄漁場域の水温環境

スケトウダラが分布していた水深300～500mの水温は2.1℃以下で、各調査点とも平年並みでした(図5)。一方、水深300m以浅の水温は平年よりも低く、特に乙部沖では約2～5℃も平年を下回っていました。

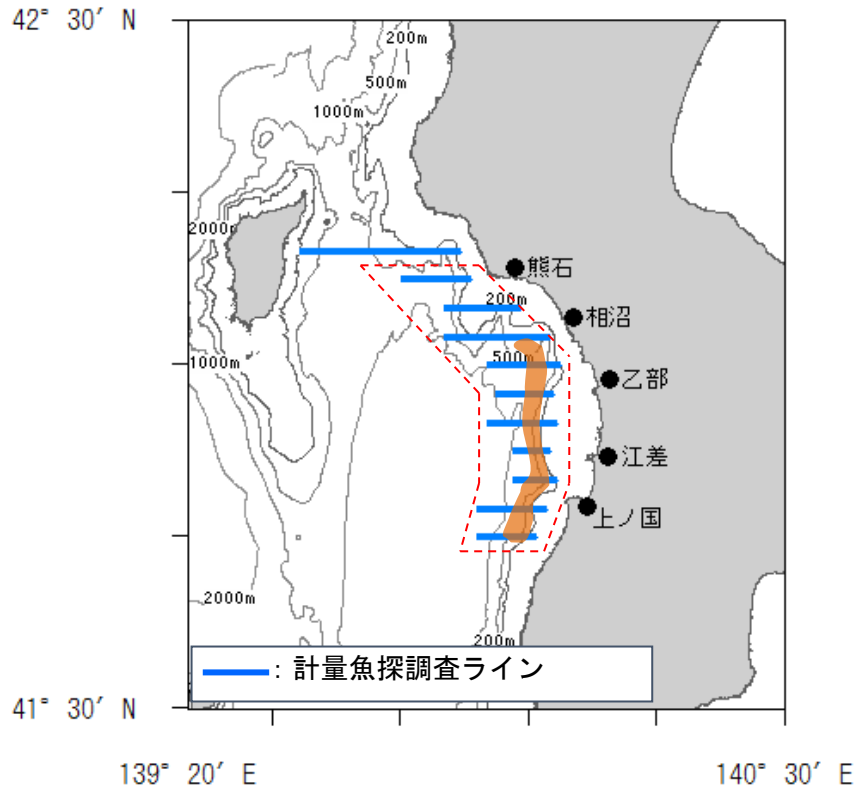


図1 調査海域図

※赤破線は図4の魚群反応量を算出した範囲

○ : スケトウダラ延縄漁場域

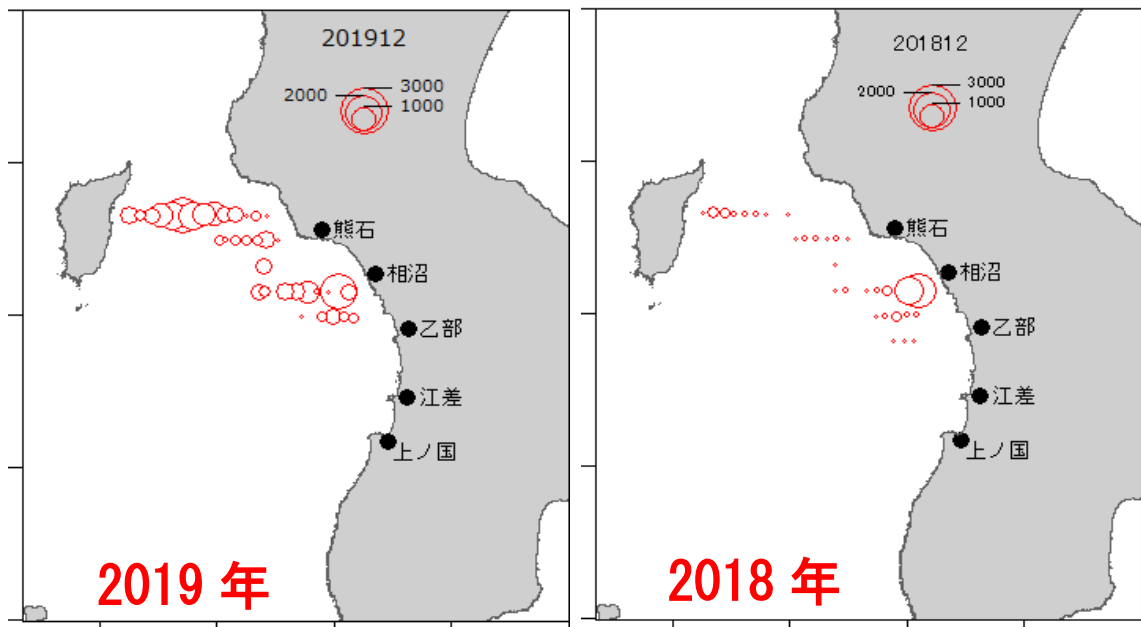


図2 計量魚探調査による魚群反応量 (NASC(m^2/nmi^2)) の水平分布

※魚群反応量 (NASC) : 1 マイル平方面積あたりの魚探反応の強さを表す。

○の大きさが魚群反応量の強さを示す

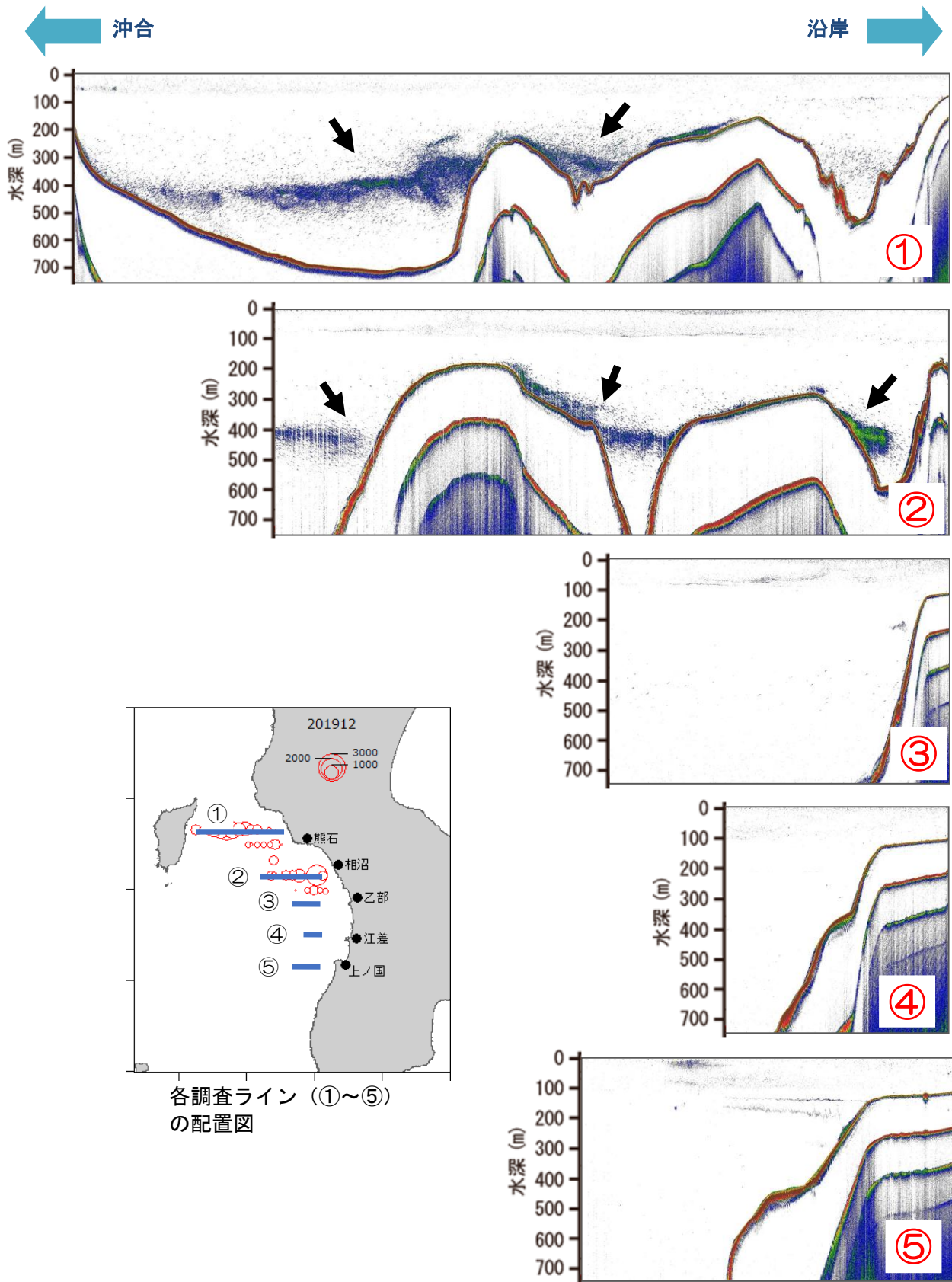


図3 スケトウダラの魚探反応図 (2019年12月)
 (全て夜間に調査を実施)
 ※矢印 はスケトウダラと考えられる反応

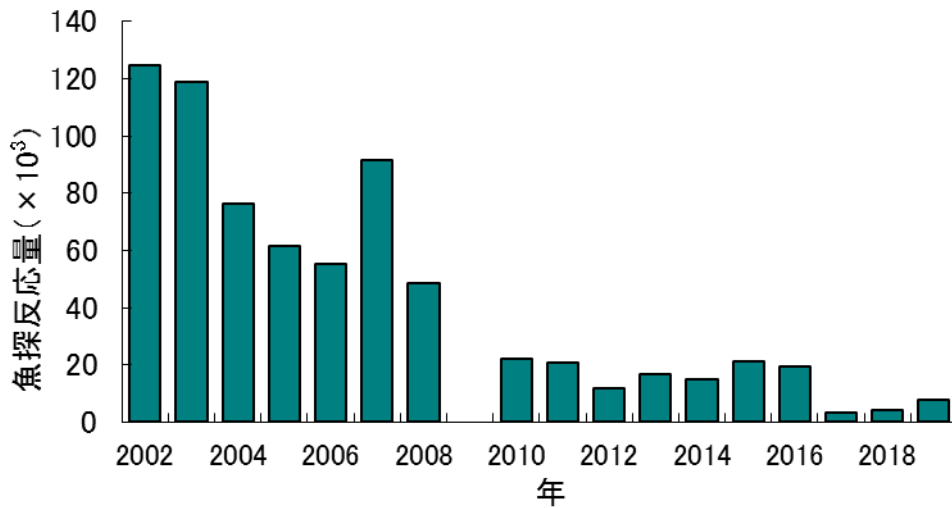


図4 スケトウダラ延縄漁場とその周辺における魚群反応量の経年変化
 ※2009年は荒天で調査できず

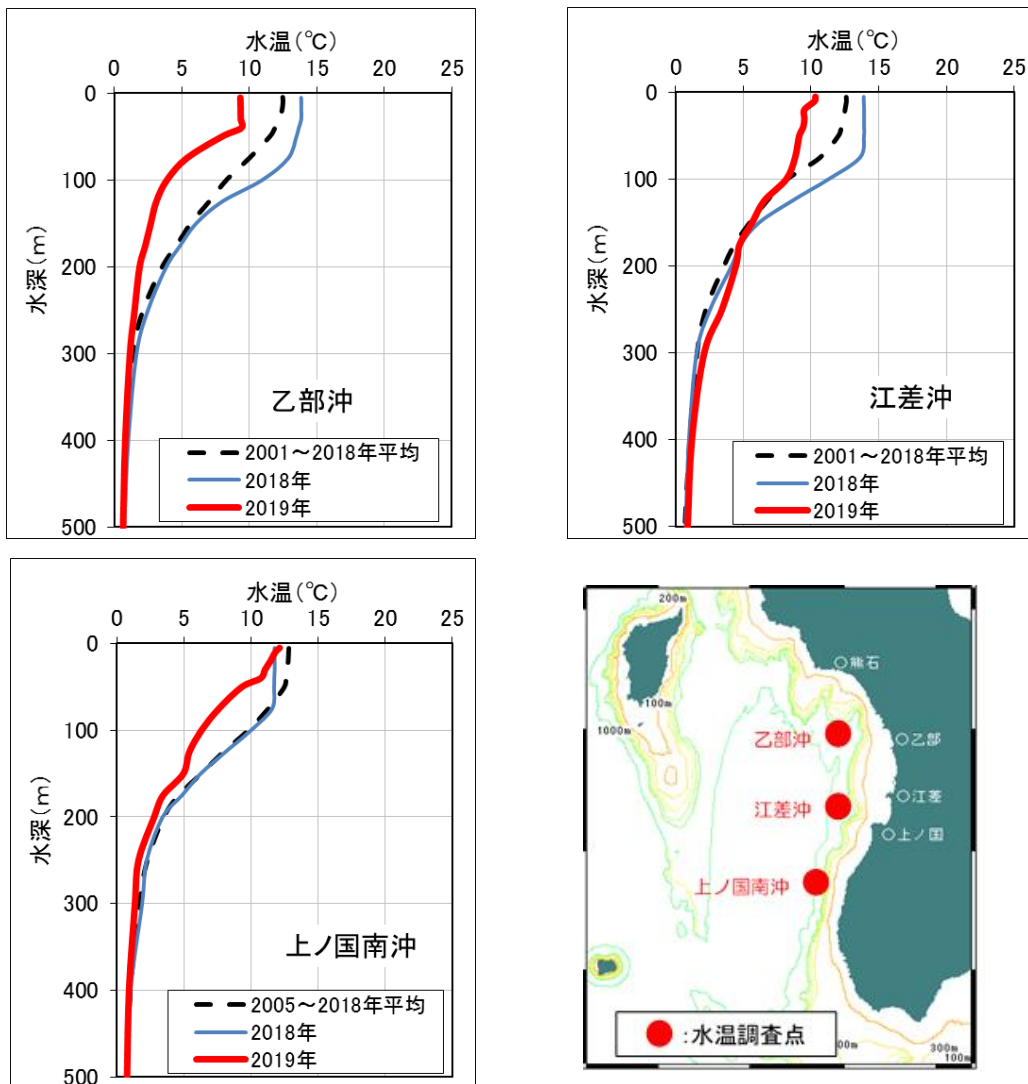


図5 乙部沖(左), 江差沖(中), 上ノ国南沖(右)の鉛直水温分布(12月)